

## デカルト的「経験」概念の多義性

——〈気づき〉としての経験——

田村 歩(筑波大学大学院)

本発表は、デカルトの学問体系における「経験」概念の機能に関する研究の一端を担うものである。周知のようにデカルトはいわゆる〈合理論〉の祖とされてきたが、それゆえ彼の体系における「経験」概念に焦点が当てられることは、他の概念に比較して少なかったといえる(英米圏においては、自然学における経験、すなわち「実験」と称されるそれを扱った研究が大半である)。そこで本発表では、デカルトにおける「経験」を主題的に扱ったフランス語圏の最近の諸研究を批判的に検討し、それらの妥当性を吟味する。要点からいえば、この概念は従来大きく二つに区分されてきた——明確な区分を導入したのは GRIMALDI であり、彼は「物理[学]的経験[*expérience physique*]」と「形而上学的経験[*expérience métaphysique*]」との二つを定立する。前者は、外的事物について受容されるものであり、「感覚によって知覚する一切のもの、第三者が語ることから聞き知る一切のもの、そして一般的に、外部から人間知性に到達する一切のもの」(*Regulae*, AT-X, 422.)から得られるといわれている。後者は、知性が「自らについての反省的観想」(*Ibid.*)から受容する一切のものであるが、知性が反省的に観想するものとは、生得観念および第一原理によって構成される場所の、自らに固有の本性であり、その生得観念は「直観」によってそれ自身で直接に知られる単純本性である。そしてこのような観念についての「直観」は、「思惟の経験」ないし「真理の形而上学的経験」と定義されうといわれている<sup>2</sup>。

このような区分は、とりわけフランス語圏の研究において継承されており、KAMBOUCHNER もまた、最新の著書『デカルトが語らなかつたこと』(2015 年)においてデカルトの「経験」には少なくとも二つの意味があるという——これは一方で、明晰判明であるものとして〔そしてその限りで〕知性が知覚するところの一切のものという意味で使用される。精神は、神の無限性や、感覚知覚を物体以外のものに関係づけることの不可能性を経験するように、思惟する限りにおいて自らの固有の存在の必然性も経験するのであり、『規則論』で与えられる意味でのあらゆる明証性、あらゆる知的直観とは、対象の十全なる経験である。そしてこの経験は常に、事物がそのようであることの必然性の経験、あるいは事物がそれ以外であることの不可能性の経験であって、「知解する[*entendre; intelligere*]」ことと「経験する[*expérimenter; experiri*]」こととは「唯一かつ同一のもの」なのである。またこれは他方で、「物体[身体]について感覚によって得られるあらゆる情報」という意味で使用される。しかしこのような意味での経験はいかなる自律性も有さず、精神が探究する知を直接もたらすものではなく、複合的な問題を学ぶために有益ないし適切な所与を構成するも

のである。そして KAMBOUCHNER によれば、デカルト自然学の原理が依拠するのは、この第二の意味の経験ではなく、第一の意味での経験である。神の観念は、神が創造したところの物質にひとたびある運動が与えられれば、神はその運動の総量に何らの足し引きもしない、ということ認識させ、個々の物体の運動が、それを取り巻く諸物体の運動によって方向や速度がすぐに変更されてしまうにも関わらずに、知性はこの運動量が自然においてどのように保存されるのかを測定することができるのである。従って、『哲学原理』第二部で呈示される三つの〈自然法則〉(Cf. *P.Ph.*, AT-VIII, art. 37; 39; 40.)を精神に確信させるのは「知的経験[*une expérience intellectuelle*]」である、と主張されている<sup>3</sup>。

しかしながら、デカルトにおける「経験」のすべての用例がこの区分に合致しうるかについてはさらなる詳細な検討が必要であると思われる。デカルトは以下のように記述している。

「この〔想像するという〕力能を、そうした物質的な事物〔の考察〕に従事する際に私が使用することを私は経験している」(*Med.*, AT-VII, 71.)

「如何なる対象をも、それが私の感覚器官に現前していない限りは、私が〔感覚〕したいと思うにしても感覚するわけにはいかないし、現前している場合には、〔感覚したくないと思っても〕感覚しないわけにはいかない、ということ私を私は経験していた」(*Ibid.*, 75.)

これらの箇所デカルトは、単に「私は使用する」や「私は感覚する／しない」とではなく、「私は使用することを経験する」や「私は感覚する／しないことを経験する」と述べているが、これらの経験は〈形而上学的経験〉であるのか〈自然学的経験〉であるのか。さらに彼は、

「ある種の人たちは[...]、その〔人間は精神をもたず高級な自動仕掛けである、という〕意見を変えるよりはむしろ、自分自身について常に自らのうちにおいて経験しないではいられないもの(=思惟)を否定するようになるであろう[...]」(*6ae Resp.*, AT-VII, 427.)

「獣は思惟しないということが彼に示されるに至っても、彼が獣と同じ仕方で活動するという意見を変えるよりはむしろ、自らにおいて意識しないことのできる不可能な、あの自分の思惟さえも自分から剥ぎ取ることを選ぶであろう[...]」(*Ibid.*)

とも述べているが、この「意識」が「思惟」を対象とする高階のものであり(両者が置換不可能であることについては、『ケンブリッジ版デカルト語彙集』(2016 年)、647 頁参照)、そして「意識」と「経験」とが対応しているように、デカルト的「経験」は、自らの行為ないし在り方への〈気づき〉として、〔彼においては未完成の〕「意識」概念との相補性を有していると思われる。本発表ではこの観点から「経験」を論じたい。

<sup>1</sup> Cf. R. M. BLAKE, "The Rôle of Experience in Descartes' Theory of Method (I)", in *The Philosophical Review* 38, no. 2 (1929): 125-143; *id.*, "The Rôle of Experience in Descartes' Theory of Method (II)", in *The Philosophical Review* 38, no. 3 (1929): 201-218; Daniel GARBET, *Descartes Embodied* (Cambridge: Cambridge University Press, 2001).

<sup>2</sup> Cf. Nicolas GRIMALDI, *L'Expérience de la pensée dans la philosophie de Descartes* (Paris: J. Vrin, 1978), 100.

<sup>3</sup> Cf. Denis KAMBOUCHNER, *Descartes n'a pas dit* (Paris: Les Belles Lettres, 2015), chap. 13.